

重症新型コロナウイルス感染症による医療の非常事態について

【新型コロナウイルス感染症重症患者受入医療機関】

京都大学医学部附属病院	病院長	宮本 享
京都府立医科大学附属病院	病院長	夜久 均
京都第一赤十字病院	病院長	池田栄人
京都第二赤十字病院	病院長	小林 裕
京都医療センター	病院長	小池 薫
宇治徳洲会病院	病院長	末吉 敦
京都市立病院	病院長	黒田啓史
京都桂病院	病院長	若園吉裕
康生会武田病院	病院長	武田 純
医仁会武田総合病院	病院長	三森経世
洛和会音羽病院	病院長	二宮 清
三菱京都病院	病院長	小野晋司
京都岡本記念病院	病院長	高木敏貴
舞鶴共済病院	病院長	布施春樹

新型コロナウイルス感染症の第3波による感染拡大が止まらず、感染症治療のみならず、感染症以外の治療すなわち医療全体が崩壊しかねない非常事態を迎えています。このままでは年末年始期間中における救急医療が危機的な状況に陥ります。

この状況を鑑み、これまで京都府において新型コロナウイルス感染症重症患者の入院治療を担ってきたすべての病院が共同し、医療崩壊に関する警鐘のメッセージを発出いたします。

なお、本日京都府や京都府医師会をはじめとする各医療団体からも注意喚起の発出がありましたので、それぞれのHPなどをご覧ください。

新型コロナウイルス感染症重症患者受入医療機関からのメッセージ

1. 京都府では新型コロナウイルス感染症の重症患者数が最近一週間で倍増以上の拡大を示しており、重症患者を受け入れてきた病床がすでに逼迫しています。

重症患者数が京都府において 30 名（京都市において 15 名）に達した場合には、がん、脳卒中、心臓病、および救急医療など通常の医療が殆ど停止するような医療崩壊をきたしかねない危機的な状況になります。

12月17日に8名であった京都府の新型コロナウイルス感染症の重症患者数は12月21日には20名（うち京都市内12名）となっています。人口が約5.3倍の東京都の同日の重症患者数63名と対比すると、京都府における深刻な感染状況が理解できます。

がん、脳卒中、心臓病など我が国において死因の上位を占める疾病あるいは移植や難病などの重症患者を受け入れるための重症病床の稼働は、既にかかなりの程度抑制されています。このまま感染が拡大すると年明けにはほとんど停止してしまいます。

2. 新型コロナウイルス感染症患者数の著増に伴い、軽症～中等症患者受入機関の感染症病床が飽和状態に近く逼迫しつつあります。

京都府においては、軽症～中等症患者受入機関と重症患者受け入れ機関が密接に連携して、重症度に応じて対象患者を相互に転院という形で受け入れてきましたが、重症患者受け入れ機関で軽快した患者を軽症～中等症患者受入機関で受け入れることが困難になりつつあります。その結果、重症患者を受け入れてきた病床の余裕がさらになくなっていきます。

3. 年末年始期間中における救急医療が危機的な状況に陥る危険があります。

軽症～中等症患者受入機関が逼迫すると、自宅や宿泊施設において待機中の無症候～軽症患者から救急要請があった場合に、受入先がなくなります。特に年末年始の休日期間中に逼迫する危険が高くなります。

4. 国民の皆様におかれましては、行政の Go To 政策にかかわらず、特に年末年始の期間中、可能な限り外出をお控えいただきますよう何卒お願い申し上げます。皆様の慎重な行動が、救わなければならない命を救うことにつながります。

コロナウイルス感染症患者、およびコロナ以外の疾患を持つ患者の救える命を救うためにも、つまりは医療崩壊を防ぐためにも、人々が移動し無症候の陽性者と接触する機会を減らして、新規感染者の発生を抑える必要があります。